

「ことば、いのち、光」

ヨハネの福音書 1:1~4

今回は以下のみことば、ヨハネの福音書 1:1~4 の箇所に記され「ことば」、「いのち」、「光」についてヘブル的考察を試みる。

1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

1:4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

1. ことば

まず「ことば」について。ことばはダーヴァール (דְבַר) である。動詞形の「言う、話す」も同じ綴りで、発音もダーヴァル (דְבַר) とほぼ同じである。このダーヴァールを形成する三つの文字について考察する。

まず最初の文字ダーレット (ד), この文字の由来は「門、戸口、扉」を意味するデレット (דֶלֶת) にあると考えられている。このデレットを動詞形にするとダーラル (דָלַל) 「ぶら下がる」という意味になり、そこから派生して「減る、衰える、低くなる」という意味も持つ。当時の天幕や幕屋の入り口は、現代の扉や戸のようなものではなく、上から「ぶら下げる」形式の、いわゆる垂れ幕であったことに由来すると考えられる。イエシュアがご自身を指して「門」だと言われた意味は、単に入り口という意味だけでなく、上から吊り下ろされた、すなわち天から下って来られたという意味も含まれると考えられる。そして神である方が人の姿になり、そのあり方を捨てることで「減る、衰える、低くなる」ことをも体現されたと考えられる。

次にベート (ב) は「家、宮、家族」を意味するバイト (בַיִת) に由来すると考えられる。ヨハネの福音書は、創世記と同様、この文字から始っており、ご自分のバイト、家である神の国を建てようとする神のご計画を第一に考えて書かれたものであることを強調していると考えられる。

そしてレーシュ (ר) は「頭、かしら」を意味するローシュ (רֹאשׁ) に由来し、派生して思考、計画という意味があると考えられる。

これら三つの文字の持つ意味、および概念を組み合わせると、「上から吊り下ろされる家」つまり「天から下って来る国」の計画という意味があると考えられる。この意味は黙示録 21:2 の預言に合致する。

黙示録

21:1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

このように、ことば、ダーヴァールには、新天新地の聖都、「新しいエルサレム」が表されていると考えられる。

2. いのち

いのちはハッイーム (𐤇𐤓𐤏) で、動詞形はハーヤー (𐤇𐤓) で「生きる、生き返る、回復する」という意味がある。ヘブル語は動詞が言葉の基本となっているので、このハーヤーを形成する三つの文字について考察する。

まずヘート (𐤇) は柵、塀を象った文字と考えられているが、言葉としてはこのハーヤーに由来する。生きることと柵、塀にどのような関係があるのかというと、柵の中で生きるか、それとも外で生きるかということである。つまり神と共に神の国の中で生きるか否かという意味である。柵の外、つまり神の国に入ることを拒むこと、神の計画に同意しないことを聖書は「やみ」にたとえている。この「やみ」はホシェフ (𐤇𐤓𐤏) と言い、同じく頭にヘートが使われているが、これは柵の外側、神から離れて「生きる」ことを意味していると考えられる。

次にヨッド (𐤓) は手を象った文字で、同じく「手」を意味するヤード (𐤓𐤓) に由来する。この手は神の手、与える、創ることを意味する。

そしてヘー (𐤇) は窓を象った文字で、「さあ、見よ！」という意味のヘー (𐤇𐤇) という言葉に由来する。

これら三つの文字の持つ意味や概念を組み合わせて考えると「神の手で（造られた）柵を見よ」「さあ見よ！神は柵を設けられた」となる。先ほどのホシェフでも述べたが、人は神の息によって生きるものとなったので、肉体は滅んでもその霊は永遠の存在である。しかも最終的には神を信じる人も信じない人もみな復活する。つまり朽ちることのない永遠の肉体が与えられる。その永遠を生きる世界が、神が設けた一つの柵によって二つに区切られ、一切の行き来が永遠に不可能となる。つまり今のこの世界ではなく、神を信じる人と信じない人がはっきりと分けられるという神の計画、いわゆる「裁き」を意味する言葉がハーヤー「いのち」であると考えられる。そしてその「裁き」とは、具体的に黙示録 20:11～15 に記されている「白い御座の裁き」を指し示していると考えられる。

黙示録

20:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。

20:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。

3. 光

光はオール (אור) で、動詞形「光る、輝く」を意味する言葉もこれと同じ綴り、同じ発音である。オールを形成する三つの文字についても見てみよう。

アーレフ (א) は、エレフ (אֵלֶף) 訳すと「雄牛」で、その頭を象った文字であるとされている。しかし調べてみると、このエレフは旧約聖書で 500 回以上も使われているが、牛という意味よりも、数の「千」という意味で用いられていることの方が圧倒的に多い。そしてこのエレフが聖書で最初に登場するのが創世記 20:16 である。

創世記

20:14 そこで、アビメレクは、羊の群れと牛の群れと男女の奴隷たちを取って来て、アブラハムに与え、またアブラハムの妻サラを彼に返した。

20:15 そして、アビメレクは言った。「見よ。私の領地があなたの前に広がっている。あなたの良いと思う所に住みなさい。」

20:16 彼はまたサラに言った。「ここに、銀千枚をあなたの兄に与える。きっと、これはあなたといっしょにいるすべての人の前で、あなたを守るものとなろう。これですべて、正しいとされよう。」

自分の妻であるサラを妹だと偽り、アビメレクをだましたアブラハムの愚かさが描かれている。圧倒的に非はアブラハムにあるのに、結果的に彼は多くの富を与えられ、正しい者とされる。その象徴が銀「千」枚、すなわちエレフである。これは神の主権と一方的な選びによって召し出されたアブラハムとその子らを祝福するという神の約束と、それを信じたアブラハムの信仰の故である。このように、アーレフという文字には、「アブラハムに対する神の約束」という意味があると考えられる。それ故この神の約束が全て成就する国、メシアなるイエシュアを王とするイスラエル王国は、エレフすなわち「千」年続く千年王国なのだと考えられる。

ヴァーヴ (ו) は「釘、杭、鉤」(וּ) を象った文字である。このヴァーヴが聖書で最初に使われている箇所が出エジプト記 26:32 である。

出エジプト

26:31 青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で垂れ幕を作る。これに巧みな細工でケルビムを織り出さなければならない。

26:32 これを、四つの銀の台座の上に据えられ、その鉤が金でできている、金をかぶせたアカシヤ材の四本の柱につける。

26:33 その垂れ幕を留め金の下に掛け、その垂れ幕の内側に、あかしの箱を運び入れる。その垂れ幕は、あなたがたのために聖所と至聖所との仕切りとなる。

垂れ幕を掛けるために、柱の上に取り付けられた鉤、それがヴァーヴの由来である。そしてこれに掛けられた垂れ幕は、聖所と至聖所を仕切るためのものである。この仕切りはモーセの幕屋、ソロモンの第一神殿、ヘロ

デの第二神殿、そしてエゼキエル書に描かれているメシア王国の神殿にも存在する。唯一ダビデの幕屋だけがこの仕切りがない。それは他の神殿がメシア王国を指し示し、ダビデの幕屋だけが、新天新地における新しいエルサレムを指し示しているためだと考えられる。つまりヴァーヴは、メシア王国、千年王国を示す文字であると考えられる。

そしてレーシュは先ほどダーヴァールで述べた通りであるが、他にも興味深いエピソードが隠されている。レーシュは人の頭を象った文字であるが、その頭を意味する言葉であるローシュ (רֹאשׁ) が、最初に登場するのが創世記 2:10 にある。

創世記

2:10 一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。

四つに分かれる川、しかしその「源」源流は一つの川であることが記されている。この「源」という言葉がローシュである。そしてそのローシュは、エデンから出ている。先ほどのダーヴァールは新しいエルサレム、そしてこのオールは千年王国と言われるメシア王国というように、互いに異なるものを指し示していると考えて、ともにレーシュの文字によって、つまり一つの源で繋がっており、そしてその源はエデンから出ていることが表されていると考えるならば、神のご計画の全体像が見えてくる。

4. 関わり

今回のヨハネ 1:1~4 をヘブル的視点で考察し、まとめると以下のような結論が出たことになる。

- ・ことば、ダーヴァール (דְּבָר) …新しいエルサレム
- ・いのち、ハッイーム (חַיִּים) …白い御座の裁き
- ・光、オール (אור) …メシア王国、千年王国

そしてことばと光、すなわちダーヴァール (דְּבָר) とオール (אור) は、レーシュ (ר) という文字を共有することによって、新しいエルサレムとメシア王国が、エデンと繋がっていることが表されていた。一方いのち、ハッイーム (חַיִּים) は、動詞形のハーヤー (חָיָה) にしても、他の二つと共有する文字を持たない。つまり共通性、関連性がない。その理由が黙示録 20:6 にあると考えられる。

黙示録

20:6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

ハッイームが示す「白い御座の裁き」は、第二の死をもたらす裁きである。その第二の死とは永遠の火の池に投げ込まれることを指す。

黙示録

20:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。

20:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

第一の復活にあずかる者、すなわちイエシュアとともに千年王国に入る者にとって第二の死はなんの力もない、すなわち「白い御座の裁き」とはなんの関わりもない。そのことがハッイームが、ダーヴァールとオールと共通の文字を持たない、共通性、関連性を持たないことに表されていると考えられる。

5. 順序

またこれら三つの言葉が記された順序について触れておく。創世記やこのヨハネの福音書のように、聖書全体の特性として、「最も重要な事柄を最初に記す」という傾向がある。今回上げた三つの言葉が記された順序は、

1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

1:4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

「ことば」>「いのち」>「光」の順である。つまり

「新天新地（新しいエルサレム）」>「白い御座の裁き」>「メシア王国、千年王国」という順序になり、神は初めに最終目標、神の計画の完成である「新天新地」を提示し、それに至るプロセスとして「裁き」と「メシア王国」を設定しておられることが表されていると考えられる。

6. イエシュアによって

そして何より重要なことは、これら三つはすべて「イエシュアの手によってなされるもの」であるということである。すなわち、

- (1) 新しいエルサレムを創造されるのはイエシュアである。
- (2) 白い御座に着座され、裁きを行うのはイエシュアである。
- (3) メシア王国の王はイエシュアである。

これらを表すみことばが、このヨハネ 1:1~4 であると考えられる。なぜならヨハネの福音書は、当然のことながらイエシュアについて書かれた書だからである。「ことば」も「いのち」もそして「光」も、存在は認められても、本来は形のないものである。しかしそれらがイエシュアによって形あるものになる、出来事として起こる。それが、目に見えない神が見える形となって現れた、イエシュアの本質、真骨頂であると結論づける。